

浜 の 地 元 学
～担い手育成への取り組み～

宿戸漁業研究会
副会長 吹 切 守

1. 地域の概要

私たちが所属する宿戸漁業協同組合は、岩手県沿岸最北の町「南部もぐりとウニの里」で知られる種市町の中心に位置しており（図1）、現在の組合員数は132名である。

2. 漁業の概要

平成13年度の漁協販売取扱数量は102トン、販売金額は2.5億円余りとなっている。

主要な漁業形態は、全国的にも珍しい干潮時に百数十メートルも露出する広大な面積の平岩盤に、人工の溝を掘った（沿岸漁業整備事業により造成）いわゆる増殖場を利用したウニ、アワビ等の採介藻漁業が中心となっている（写真1）。中でもキタムラサキウニについては、沖からの移植作業によって、品質の良いウニを安定生産している。

3. 研究会の組織及び運営

宿戸漁業研究会は、昭和52年に組織され、現在の会員数は27名である。当研究会は潜水法導入によるアワビ・ウニの資源増大について、アワビ養殖技術向上について中心となって活動した。現在行っている研究会の活動は各種増養殖試験8項目（表1）を実施している。

4. 実践活動課題選定の動機

私たちの宿戸漁協でも例外でなく高齢化が進み、年々組合員数は減少している。この原因の一つとして、子供達の浜離れがあると思う。以前、子供たちは浜の出入りは自由で、私達の年代までは浜で遊び、その遊びの中でいろいろなことを学んだ。しかし、今の子供たちは密漁対策や学校にプールが整備されたことにより浜で遊ぶ機会がなくなった。そこで、この後継者不足の打開策として、地元の小学生を対象とした少年水産教室の開催と種市高校海洋開発科への潜水実習支援を実施している。

少年水産教室では海への興味・関心を深めてもらうため平成7年から継続して開催している（写真2,3）。種市高校への潜水実習支援では、より実践に則した経験をさせることで水産業の楽しさ、難しさを学んでもらいたいと思い昨年から開催している。

この活動を通して、地元種市の文化（潜水技術）や資源（磯根資源）を見つめなおし、それを大切に守り育てている宿戸の水産業を今の子供たちに学んでもらおうと取り組んでいる。

5. 実践活動の状況及び成果

①宿戸小学校の少年水産教室について

少年水産教室を開催するにあたって、当地区は、地形等の関係から採介藻漁業を主に行っており、ウニの生産量が岩手県内で1番の種市であることから、ウニ・アワビ等のつくり育てる漁業、ウニの体の構造、アワビ養殖場の見学、干出岩盤上での生物観察及びウニ採り、ウニむき身作業体験などを実施した。

アワビ養殖場の見学では、ブロックに小さなアワビが沢山ついているのを見て、児童たちは驚くとともに、アワビの殻がなぜ緑色なのか不思議がっていた。

干出岩盤上での生物観察では、ぬれる事も気にせず元気いっぱい、カニやツブを採り、ウニ採りでは、一般の漁場で天然のウニを直接採ってもらった。また、自分で採ったウニを、ウニ割器・ピンセット・スプーンを使い不器用ながらもわたを取り除き、満面の笑みをうかべながらウニを食べていた(写真4)。言葉による学習と経験による学習によって、資源管理について子供たちなりに考え、理解してくれたものと思う。

最後に児童から、「楽しかった」との感想が得られ、今後もこの活動を続けることにより、海の近くで過ごしている地元の小学生でも普段経験できない岩盤での生物観察やウニ採りなど、自然とのふれあいの中で浜の仕事に興味をもってもらえたと強く感じた。

成果として、次に述べる種市高校への潜水実習支援では、実習に参加した生徒と話をしたところ、水産教室のことを覚えており、その経験も水産に興味をもった一因であると話していたことである。この言葉を聞き、長年の活動が一つの形となって現れたものと嬉しく思うとともに、継続することへの意義を再確認した。

②種市高校海洋開発科への潜水実習及び工業クラブ研究支援について

種市町には種市高校海洋開発科があり、この学科は潜水土を育成できる全国でも数少ない学科である。私達の主漁業である採介藻漁業ではウニ・アワビを素潜りで漁獲することから、潜水技術の習得は種市の漁師にとって必要不可欠のものである。

また、ウニの移殖とは、深場の身入りの悪いウニをスクーバ潜水で採捕し、沿岸漁場整備事業で造成した浅場の海藻の生えやすい増殖場に移すことであり、餌が不足する際は給餌を行うなどの管理を行うことができ、品質の良いウニを安定的に生産するために重要な作業である。

このことから、学校側と連携し、昨年からは、生徒達の潜水技術の向上と地域貢献を目的とした、スクーバ潜水によるウニの移殖作業実習を実施している。

今回の潜水実習では、ウニの移殖作業の重要性を説明した後、当研究会の数名と一緒に潜り、ウニを採捕するための鉤及びタモの使い方を指導した(写真5)。

指導の内容として、海での作業では海流があり姿勢の保持が難しく、プールでの練習では身につかない技術である。しかし、ウニの移殖作業ではウニを傷つけないように。また、作業効率からもすばやく作業を行わなければならないので、この基本を体得できるよう指導した。

実習の後半には最初の頃と比べて姿勢が安定し、作業もスムーズに行えるようになったことから、技術習得のヒントを体得できたと思われる。

次に、種市高校の工業クラブへの支援について、昨年のウニの移殖実習時に、今、海のことや漁場で困っている事がないか生徒から聞かれ、当研究会でも行っている磯焼け問題について話した所、工業クラブはこの問題に着目し、宿戸の漁場において、磯焼けの原因究明と問題解決に向けた試験研究を実施した。

当研究会ではこの試験研究に対し、長年の経験からどのような時期に海藻が付着しやすいか、また、どのようなブロックに付着しやすいか情報提供したほか、船の手配や試験漁場の提供などで協力を行った（写真6）。

この試験は今年も実施しており、研究会としても継続して協力する。

この試験の成果を昨年、岩手県の高校工業クラブの発表大会で、「海に適したコンクリートの製作」と題して生徒が発表し、見事最優秀賞に輝いた。この受賞は試験に協力したわれわれ研究会にとっても嬉しく、また、この子供たちが浜に帰ってきてくれたら、どんなに頼もしいことだろうと、考えずにはいられなかった。

生徒達の中には、一度企業へ就職するが、何年か後には地元に戻って漁業を継ぐ予定の子もいることから、このような交流をとおして、漁業の楽しさ、難しさ、漁業に対する興味と、理解を持ってもらい、ひとりでも多くの担い手が増えてくれることを期待したいと思う。

6. 波及効果

期待できる効果としては、少年水産教室を実施することにより、子供の頃から浜の生物や地元の漁業を体験することができることから、漁業に興味を持つとともに、将来、漁業に従事することに対し抵抗感が薄れる。

種市高校への潜水実習支援では、①高校側との連携強化に繋がる。②他の地区でもこの活動を耳にして、自分達の浜でも実習をやりたいという話がでてくる。③生徒達に地元の浜が学習のフィールドとなることで、実践的な潜水技術の向上に繋がる。④生徒達に地域沿岸漁業の理解、興味が得られ、場合によっては、漁業後継者に繋がる可能性がある。

また、私たち漁業者も生徒へ教えることにより、漁業を見つめなおすきっかけとなり、新たにやる気おきるなど相乗効果が現れ始めている。

7. 今後の課題や計画と問題点

今後の後継者対策の活動は、小中高一環で水産業への学習支援を行い、地元の主産業である水産に興味・関心を持ってもらう必要がある。現在の活動は小学校と高校のみであることから、中学校においても何らかの経験ができるよう検討したい。

また、今回の活動を行うにあたり、特別採捕許可や小型船舶機構（JCI）の検査が必要となり、諸手続きや検査費用など負担が大きく、予想以上に手間がかかった。

最後に研究会の今後の取り組みとして、新しい増養殖魚種の開拓や効果的な漁場管理手法など新しい技術の開発により私たち漁家の所得向上の一端を担えるよう努力するほか、既存の技術を含めて漁業者として必要な技術をこれからの若い世代に伝授し、後継者不足の解決に向けて研究会活動を続けていく。

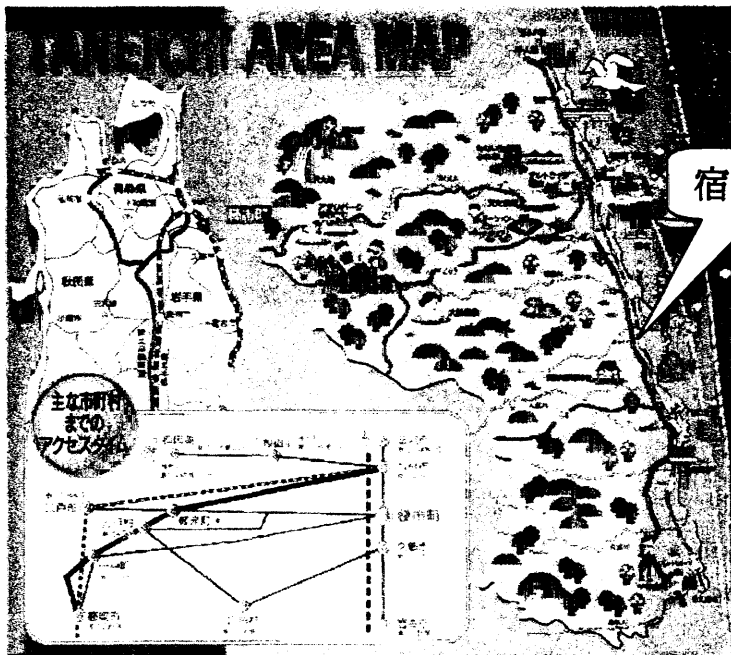


図1 岩手県種市町宿戸

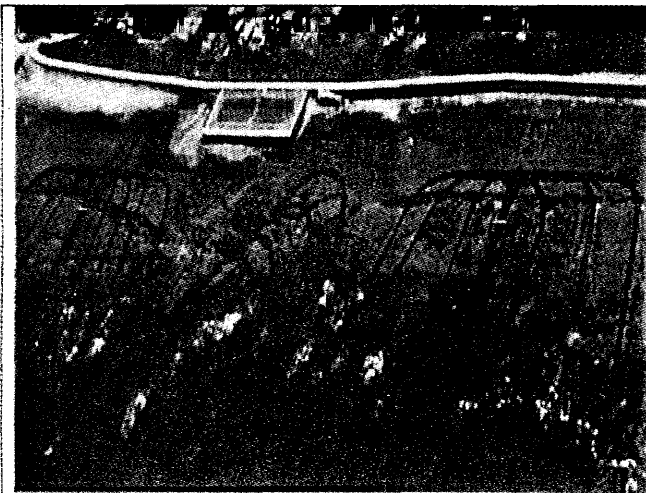


写真1 増殖場(岩盤)



写真2 つくり育てる漁業の学習



写真3 浜での学習



写真4 ウニむき作業



写真5 潜水実習



写真6 ブロック設置

表1 主な研究会での取り組み

① 未利用漁場造成試験
② 稚ナマコ増養殖試験
③ 優良アワビ養殖試験
④ ブロック石灰藻除去試験
⑤ 種市高校海洋開発科への支援
⑥ 宿戸小学校の少年水産教室
⑦ 害敵駆除
⑧ 岡谷稲荷神社例大祭での海産物の直売

表2 波及効果

① 将来、漁業に従事することに対し抵抗感が薄れる
② 種市高校との連携強化
③ 他の浜からの実習依頼
④ 生徒達の潜水技術向上
⑤ 漁業への興味関心が得られ、漁業後継者に繋がる
⑥ 漁業者の意欲向上